

歴史文化を踏まえた環境総合教育の拠点形成

ー地域と国際を結ぶフィールド実践による主体形成ー

1. 本学の取組が採択された理由

「本取組は教室での授業（講義）とフィールドでの実技（体験）をうまく組み合わせながら自然環境と自然環境がうみだす文化とを総合的に理解しようとするもので、プログラムの全体に無理がなく、楽しみながら環境学習がおこなわれるように工夫されているのが大きな特徴です。またフィールド・ツアーの中に、タイにおける実習が組み込まれ、また稲作に限らず間伐を含む森林での実技を取り入れるなど、バラエティーにも富んでおり、総合的な“地球学・人間学”につながるひろがりを感じることができます。」（文部科学省から通知された採択理由より抜粋）



今夏に実施されたタイ・アユタヤ県の運河における調査実習

2. 本学の取組の特徴

環境教育というと、得てして自然環境や省資源、省エネルギーに特化しがちななかで、文化とりわけ日本の文化を強く意識したプログラムを構築した点は、本学の建学の精神を彷彿させるものでもあり、大きな特徴となっています。プログラムに対する取組が全学的なものになっていること、地域と国際をつなぐ総合性を目指している点もひとつの特徴です。

本学は、文・神道文化・法・経済の4学部で構成される人文・社会科学系の大学ですが、独自に開発した先駆的な情報システム（K-SMAPY）を活用して、早くから情報ネットワーク形成に力を入れてきました。渋谷キャンパスで今年5月末日に竣工した18階建ての若木タワーには、最新の設備が導入され、情報ネットワークの形成が促進されております。すでに、本学では、経済学部（経済ネットワーク学学科）を中心として、充実した情報システムを活用しつつ、フィールド実践型（現場調査実習）の教育に熱心に取り組んできました。

平成18年度に現代GPに採択された本学の環境教育プログラムは、第1に、日本文化・歴史・神道の研究という本学の伝統を踏まえ、歴史的・文化的視点から環境問題を立体的・重層的に学ぶ教育体制の構築を目指していることです。具体的には、環境考古学や環境民俗学などの知見を踏まえて、歴史・文化・宗教・経済・法学的な視点を組み入れた総合講座「歴史・文化的視点からの自然との共生」を設けることにより、導入環境教育の充実を図ります。

第2に、現実の環境問題を深く学ぶために、講義科目の充実とともに、様々なフィールド学習への学生の主体的参加の仕組みを工夫しています。国の内外の現場に出向き、環境問題に関わる人々のネットワークやNGO、NPOの活動に触れ、生活実感をもって環境問題が理解できます。参加した学生は、現場体験に基づいて主体的に考え、討論し、批判的考察を行うことが求められます。フィールド学習の成果は、E-learningなどの手法を使って教材化、データベース化し、また、情報ネットワークを活用して、それを広く社会へ発信していきます。

第3に、環境問題への総合的理解は、国際交流におけるコミュニケーションを通して、日本の生活文化を踏まえながら、国際的視野から行います。具体的には、海外協定校からの交換留学生を対象とする英語による授業に環境教育を取り入れたり、海外協定校での共同セミナーの場において、外国の学生と意見交換による学習を行います。